

あとがき

渡邊正氏の略歴と人柄について紹介したい。

渡邊正氏は、通称は直士、大正五（一九一六）年東京神田の生れで、ちやちやきの江戸っ子である。商家の腕白坊主として長し、厳格な祖父君の薫陶を得た。東京開成中学校第四学年から陸軍士官学校に入校し（第四十九期生）、昭和十二（一九三七）年に卒業、原隊は歩兵第一聯隊（当時北滿孫兵に駐在）であった。初年兵教育に従事していたが、折から支那事変の勃発に伴い教え子である部下を率いて北支戦線に出動した。張家口攻略に際し永定河上流の渡河作戦に戦功を立て功五級に叙せられている。

その後太原の戦闘で負傷、また、昭和十四（一九三九）年のノモンハン事件では中隊長として参戦、次いで昭和十六年から同十八年まで（一九四一―一九四三）陸軍予科士官学校区隊長として五十六期、五十七期、五十八期の士官候補生の訓育に携った。戦地帰りの古参区隊長という特異の存在で、訓練は厳しかったが、その反面激しい演習の間に助教の下士官にトマトを用意させて候補生に振舞うなど、人情味に溢れる「区スケ」であった。

北支那方面軍参謀部に転出した後、昭和十八（一九四三）年難関の陸軍大学校に入校（第五十九期生）、同十九（一九四四）年五月に卒業して、直ちに参謀本部参謀、大本営参謀（第一部）に補せられた。

参謀本部第二部は情報担当で、部長は奇しくも北支那方面軍参謀副長から転補した有末精三中将であった。渡邊参謀は第二部内で第七課、第

六課と移り、その後主として第四班において、情報に関する総合情勢判断、兵要地誌、および陸地測量部の管轄を担当し、終戦により昭和二十（一九四五）年十月に参謀本部が廃止されるまで勤務した。

参謀本部時代における渡邊参謀の業績は、総説に述べたように、第一に大東亜戦争末期に本土決戦に備えて兵要地理調査研究会を組織し、我が国地理学者の総力を結集して兵要地理に関する資料を作成したこと、第二に、終戦に伴う陸地測量部の処理に関して、平時の官庁に再編成することを意見具申すると共に、自ら陸軍（参謀本部および陸軍省）と内務省との間の折衝に携り、一週間という極めて短期間のうちに、内務省地理調査所として再発足させたことが挙げられる。何れも崇高な愛国心、強固な責任感、透徹した洞察力、そして余人の追隨を許さぬ行動力なくしては為し得ない事柄である。

終戦直後に進駐軍の要請で行われた、松本に疎開中の陸地測量部の視察に随行したときの状況は、信濃毎日新聞の「地理調査所物語」の記事に詳しいが、正に渡邊参謀の面目躍如たるものがあり、このとき同行した進駐軍将士の信頼を得て、親しい交友関係が生じている。なお、特に信濃毎日新聞の取材を受け入れたのは、昭和二十（一九四五）年当時、渡邊氏は梓村村長の好意により、両親ご家族を同地に疎開させており、地元深い恩義を感じているからといふ。

戦後の渡邊正氏は、第二復員省において終戦処理を担当し、米軍との折衝に従事するとともに、予てよりの念願として兵要地理調査要領をまとめるなどの総括を試みている。

昭和二十四（一九四九）年渡邊氏は海外に在住していた測量関係者の復

員援護と処遇のため、日本開発測量株式会社を設立して社長に就任、また、昭和三十(一九五五)年には東南アジア調査会(後に社団法人となる)の設立に尽力し、爾来内閣調査室(現内閣情報調査室)の外郭機関として長期に亙り同会を統率し活動を行った。

現在では、アジア同友会会長、財団法人ユネスコ・アジア文化センター評議員などとして、長年に亙る内外の人脈を通じて培った信頼関係を生かして、国際的な活動を含む実に多方面の活動を精力的に続けている。しかしながら、決して己を誇示することのない人柄のために、同期生の間でも氏の活躍は意外に知られていない。著書には数々の貴重な情報資料があるが、その中に刊行物として「東南アジア要覧(年報)」があり靖国偕行文庫に寄附された。

次に特筆したいのは、渡邊正氏は終戦に際して直面した陸地測量部の処理と内務省地理調査所の設立に心血を注いだが、地理調査所の設立後は、一度たりとも同所を訪れたことは無かったということである。平時の官庁として発足した以上、旧軍人が口を出すべきではないという氏の信念の現れである。しかしながら、氏は終戦後取りあえず必要と判断して保存した資料の寄託先として、国土地理院を第一に挙げている。それだけに氏の「地理調査所」に対する思い入れの深さを感じさせられる。筆者が勧めて、つくば市の国土交通省国土地理院に同道を願い、当時の星林由尚院長を表敬したのは、平成十五(二〇〇三)年十一月のことであり、実に終戦後五十八年の歳月を経ていた。国土地理院の発展振りを目の当りにして、氏は非常に喜ばれた。

ここで今回渡邊氏の保存資料を外邦図研究会が複製公開するに至った

経緯について述べておきたい。

本来「渡邊正氏資料」は兵要地理および地誌関係の記録資料として、終戦後渡邊正氏が将来を予期して保存していたものであるが、その整理および寄託先について、同氏の相談を受けたのが高木勲氏であった。高木勲氏は陸上自衛隊で地誌を担当していた経歴があり、また陸軍士官学校卒業生で(第五十八期生)渡邊正氏の後輩に当る。そして資料の寄託先の関係から高木勲氏の相談を受けたのが筆者(金森敏知)であった。筆者は一貫して建設省国土地理院に勤務した経験を持ち、高木勲氏とは業務を通じて親交があった。加えて筆者は終戦時に仙台陸軍幼年学校生徒であり(第四十八期生、陸軍士官学校では第六十三期生相当となる)、このような関係から筆者も積極的に渡邊正氏資料の整理に関与することになった。

平成十五(二〇〇三)年八月に沖縄県宜野湾市で日本国際地図学会の地方大会が開催されたが、このとき、外邦図研究会の研究代表者である小林茂教授がこれまでの外邦図研究会の活動状況について発表した際の質疑で、筆者は渡邊正氏資料について紹介をした。それは同資料のなかで、昭和二十(一九四五)年に参謀本部の主宰で開催された兵要地理調査研究会の存在が、終戦後に外邦図が大学・研究所等に広く頒布されたことに影響したに違いないと判断したからであった。

このようにして、渡邊正氏と外邦図研究会との間に接点が生じた。平成十五(二〇〇三)年十一月八日(土)駒沢大学で開かれた第四回外邦図研究会研究集会では、終戦前後の状況に関して同氏による招待講演が行われた。

外邦図研究会の研究代表者側では、研究者の便宜の為に渡邊正氏資料の複製公開を企図し、その旨を同氏に懇請した。氏は個人的に密かに保管していた資料であり公開を予定していなかったことであるので、当初は承諾されなかったが、内容的に差支えないと判断される資料に限り公開することになった。資料の選別に当っては、渡邊正氏は全ての資料に目を通して自ら公開の是非を決定した。責任の所在を明らかにする氏の信念によるものである。

総説で述べたように、渡邊正氏資料は、外邦図の研究者にとって背景事情を知る上で極めて貴重な第一級資料である。広く意義深く活用されることを望むものである。

(金澤敏知)